報告12 平城京と唐長安城――その類似点――

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 晃樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000287

報告12　平城京と唐長安城　－その類似点－

今井　晃樹（奈良文化財研究所）

1　平城京の基礎データ

歴　史　藤原京が都であった和銅元年（708）２月15日に元明天皇が遷都の詔を発し、同年３月13日に造宮卿、９月30日に造平城京司長官を任命した。これにより新都の造営が事実上開始したと考える。同年12月５日には平城宮造営地で地鎮祭を実施、１年数カ月後の和銅３年（710）３月10日に平城京に遷都した[1)]。平城京は延暦３年（784）に長岡京に遷都するまで、74年間、日本の都であった。

位置と地形　平城京は、奈良県奈良市の北部、奈良盆地の北端に位置する。平城宮中心の座標は、北緯34°41′29″、東経135°47′39″である。平城京は、北、東、西の三方を山に囲まれ、京内の東には佐保川、西には秋篠川がある。２つの川は京の南で合流しさらに南流する。平城京の立地は、南へ開けた北高南低の地形である（図１・２）。この場所は、遷都の詔にあるように「四禽図に叶い、三山鎮めを作り、亀筮並に従う」優れた土地であった[2)]。

規模と構造　平城宮は京の北端にあり、約１㎞四方の東側に張り出し部をもつ（図３・８）。平城宮の正門、朱雀門の南、平城京の南北中軸線上には、南北長約3.8㎞の朱雀大路が敷設されていた。平城宮の南面には幅約37mの二条大路が東西にのびている。京内は朱雀大路を境に東の左京と西の右京に分かれる。京域は、南北９条（4787m）、東西８坊（4255m）の主要部分と、東側に南北４条（2128m）、東西三坊（1595m）の張り出し部である「外京」、右京北辺に南北0.5条（266m）、東西３坊（1596m）の「北辺坊」とよばれる部分からなる。朱雀大路の南端には羅城門があり、羅城門の東西には瓦屋根をもつ築地塀が存在した。

坊の構造　東西方向の条と南北方向の坊とよばれる大路に囲まれた正方形の区画である坊は約532m四方で、平城京内の坊の合計は72坊（主要部分）＋12坊（外京）＋1.5坊（北辺坊）＝85.5坊となるが、うち4.75坊は平城宮が占める（図３）。坊内は東西南北の道路によって16の坪に区画される。坊の周囲には築地塀を設けるところもあり、坊に出入りする坊門も存在した。

京内の構成　京内には、宮外官衙、天皇の勅願寺や東西の市のほか、貴族の邸宅、貴族が造営した寺院などが大規模な区画を占有した。そのほか、下級官人や庶民の宅地が存在した。近年では諸国の出先機関である調邸の存在を示唆する発掘成果もみられる。

2　平城京と唐長安城との類似点

以下、平城京と唐長安城との類似点を実証的に研究した井上和人の説を紹介する[3)]。

平城京の面積は唐長安城の1/4　唐長安城の外郭城は、南北8651m、東西9721mを測る[4)]。平城京主要部分の南北4787mは長安城東西の1/2（4861m）、同東西4255mは長安城南北の1/2（4326m）に近似する。平城京主要部分を90度回転させると、平城京主要部分の面積は、長安城の約1/4となることがあきらかになった（図４）。

朱雀大路と朱雀街　平城宮は平城京の南北中軸線上の北端に位置し、その結果、朱雀大路が約3.8㎞と長くなっている。前代の都である藤原京では、宮が京の中央に位置し、朱雀大路も南北２㎞強と平城京より短く、幅も70大尺（約25m）と狭い。平城京造営に際して、唐長安城の宮の位置や朱雀街の長さを意識したと考える。

唐長安城朱雀街の路面幅は、150～155mを測る[5)]。平城京の朱雀大路は両側溝の心心間距離で幅210大尺（約75m）であり、朱雀街の幅の約1/2となっている[6)]。また、朱雀街の幅は、東西幅100歩（500尺）となっており[7)]、朱雀大路両側の築地塀心心間距離が250大尺であるから、やはり朱雀街の1/2を指向している可能性が高い（図５）[8)]。

羅城と城壁　藤原京には京域を取り囲む羅城やその正門である羅城門はなかったと考えられているが、平

城京では羅城や羅城門の遺構を確認している。平城京羅城門の建物規模は桁行７間（約34m）、梁行２間（約９m）に復元でき、中央５間に門扉が設置されていたと想定すると、唐長安城の明徳門が５門道であるのと類似する[9]。

羅城（築地塀）の遺構は平城京南面東端（平城京東南隅）において確認されており[10]、その高さは平安時代（10世紀）編纂の『延喜式』によると、13大尺（約4.6m）と推定される[11]（図６）。唐長安城外廓城の高さは１丈８尺（約5.3m）であるから、かなり近い値といえよう[12]。同築地塀の南には東西方向の溝が検出されており、溝幅は約3.7mを測る[13]。『延喜式』には、羅城の外には幅１丈（10尺）の溝をともなうとあり[14]、10大尺（約3.6m）は発掘調査で検出した溝幅とも一致する。このような状況から、平城京の南面には全面、羅城（築地塀）とその外側に溝が設置されていたと考えられる。ただし、平城京の東面や西面に築地塀が存在していたかどうかは現在のところ不明である。

越田池と曲江池　平城京の東南隅には五徳池とよばれる池が現存する（図２・３）。池の現状は長径約400m、短径約250mの規模を測る（図７）。池の北岸には「池ノ内」という字名がのこっており、以前の池は現在よりも大きかった可能性もあろう。この池は、平安時代に編纂された『日本霊異記』によれば、当時は「越田池」と呼ばれており、平城京内で出土した奈良時代の木簡に「越田池」、「越田瓦屋」を記したものがあることから、奈良時代には存在した池である[15]。2022年、五徳池の南岸で奈良時代の瓦窯跡が発掘調査され、「越田瓦屋」が池付近に存在したことが実証され話題となった[16]。「越田池」と唐長安城の「曲江池」の位置が京や城の東南隅であることは偶然の一致とは考え難く、唐長安城を参考にしたのであろう。

３　平城宮と唐長安城大明宮との類似点

以下は、近年の発掘調査成果をとりいれた筆者の説を概述する。

平城宮大極殿と大明宮含元殿　平城宮の南北中軸線上には、南から朱雀門、中央区朝堂院南門、第一次大極殿院南門、第一次大極殿が並び建つ（図８）。第一次大極殿は高さ約２mの磚積擁壁を有する土台の上に造営された。土台の左右には斜道が設置され、全体が逆凹字形の平面形となる。この土台が大明宮含元殿の龍尾道と類似することが従前から指摘されていた。第一次大極殿の南に広がる広大な礫敷広場、さらにその南に位置する中央区朝堂院の内庭に注目したところ、龍尾道だけではなく第一次大極殿殿前の広場と中央区朝堂院内庭を合わせた面積が含元殿前の広場に匹敵することがあきらかになった（図９）[17]。第一次大極殿院および中央区朝堂院では、天皇の即位式ほか、天皇が大極殿に出御し元日朝賀、外国使節の謁見や賜宴などがおこなわれた。こうした機能は、含元殿およびその殿前広場での儀式と共通し、その面積も近似している。また、前代の藤原宮にはなかった国家の儀式や宴会のみを実施する空間（平城宮第一次大極殿院と中央区朝堂院）を平城宮に造営した意義は極めて大きいと考えなければならない。平城宮の儀式空間は含元殿とその殿前広場を参考にしたと考える。

宮内苑池　奈良時代の正史『続日本紀』によると、平城宮内には「西池宮」、「西南池亭」、「楊梅宮南池」などの苑池が存在したことがわかる[18]。現在の平城宮の地形や発掘調査から、それぞれの池の位置がおおよそわかるようになった（図８）。複数の苑池の存在は前代の藤原宮とは異なる平城宮の特徴といえる。苑池の位置は、平城宮が位置する地形によるところが大きいものの、唐大明宮の東に龍首池や東内苑が存在したことが影響している可能性は高いと考えられる。とくに正方形で作るべき宮の東にあえて張り出し部を作り出した理由の一つとして、大明宮の東内苑の存在は大きいと考える。

平城宮松林苑と大明宮北半部　平城宮の北には松林苑とよばれた苑が存在していた（図10）。その周囲は築地塀で囲まれ、南北約1.3㎞、東西約1.8㎞の規模を有する。苑内には内郭とよばれる宮殿区や小規模な苑池が複数存在していたことが発掘調査であきらかになっている[19]。現在も苑内には中島を有する池が複数残存し、なかでも松林苑の南に位置する水上池は、奈良時代に存在した池であることが発掘調査で証明されている。水上池の現状規模は東西約390m、南北約380mを測る。これは唐大明宮の太液池に匹敵する大きさである。

松林苑の内郭は周囲を築地塀で囲い、中には宮殿の基壇が複数みつかっている。内郭の規模は南北210～300m、東西200mほどに復元されている。この区画が『続日本紀』に現れる松林宮であった可能性は高い。松林宮では、節会が催され、天皇から臣下へ賜宴、賜禄、賜物がおこなわれた[20]。大明宮の麟徳殿は、巨大な宮殿建物の周囲を版築の塀で囲まれており、その規模は南北約170m、東西約120mに復元されている[21]。麟徳殿では皇帝から臣下や外国使節に対して賞賜や賜宴が頻繁に行われていた。また、これらは節会にともなうことも多い[22]。

同縮尺で並べた平城宮と大明宮の平面図を比較すると、その規模や構造がかなり類似しており、両宮の北半部に注目すると、水上池と太液池はその面積が近似し、内郭（松林宮）と麟徳殿はその位置や規模、機能が一致するといった特徴があげられる（図10）。従来説では松林苑は唐長安城の禁苑や西内苑に当たるとされていたが、その規模や構造を仔細に検討すると、松林苑は大明宮北半部の苑池部分を模した空間であったと考えたほうが、理解しやすい[23]。

4　唐長安城の状況を参考にした背景

平城京の規模や平面形は唐長安城と似て非なるものであるが、平城京主要部分の南北・東西の長さや朱雀大路の幅が、唐長安城の1/2であること、南北に長い朱雀大路、前代の都にはなかった羅城門と羅城の造営、第一次大極殿の龍尾道や殿前広場の面積、平城宮北方の苑池や招宴施設の位置など、上述した唐長安城との類似点は多岐にわたり、単なる伝聞では達成しえないと考える。

では、こうした詳細な唐長安城の情報をどのようにして入手したのであろうか。平城京造営以前の大宝４年（704）に帰国した第７次遣唐使は、粟田真人を筆頭に大宝２年（702）に唐長安城の麟徳殿において則天武后に謁見をしている[24]。彼らは、唐長安城および大明宮を実見しているのだ。それでも巨大な長安城や朱雀街の規模は、目測では知り得ないであろう。おそらく唐長安城にかんする図面や寸法などを正式な外交交渉をとおして入手したものと想像する。

この見解を補強する資料として正倉院宝物に掲載された２つの屏風について言及したい。奈良時代の聖武天皇の遺品目録である『国家珍宝帳』（正倉院宝物の目録）には「大唐古様宮殿画屏風六扇」と書かれた屏風が２つ記載されている。２つの屏風は残念ながら現存していないが、名称から唐の宮殿を描いたものであることは疑いない。「古様」とは玄宗以前の絵画様式を示していること、『国家珍宝帳』には２つの屏風とは別に「大唐勤政楼前歓楽図屏風六扇」１点があるので、２つの「古様」屏風は興慶宮を除く太極宮と大明宮の絵を描いたものと想像できる。２つの屏風が第７次遣唐使によって日本にもたらされた証拠はないが、こうした宮殿の様子を描いた屏風の存在は、奈良時代前半の日本が唐の宮殿に関するかなり詳しい情報を得ていたことの証左となるであろう[25]。

以上のように、上記に挙げた平城京と長安城の類似点は単なる偶然の一致ではなく、当時の日本が新たな都城の建設を見据えて国家事業として唐長安城の状況をつぶさに観察し、正式な外交交渉を通じて必要な情報を得た結果であると考える。

注

1）『続日本記』巻第４・５元明天皇。
2）『続日本記』巻第４・元明天皇・和銅元年２月戊寅条「方今平城之地。四禽叶圖。三山作鎮。龜筮並從。」
3）井上和人「藤原京・平城京造営の実像」『古代都城制条里制の実証的研究』学生社、2004年、同「古代都城建設の実像」『日本古代都城制の研究』吉川弘文館、2008年。
4）中国科学院考古研究所西安唐城発掘隊「唐代長安城考古紀略」『考古』1963年第11期。
5）注４）前掲報告。
6）奈良時代の尺には、大尺と小尺があり、大尺は0.355m、小尺は0.296mである。奈良時代の小尺は唐代の尺0.294mに近似する。
7）『唐両京条坊考』巻２・西京・外郭城。
8）井上和人「古代都城建設の実像」『日本古代都城制の研究』吉川弘文館、2008年。
9）井上和人「平城京羅城門再考　－平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里」『古代都城制条里制の実証的研究』学生社、

2004年。
10）奈良国立文化財研究所編『市道九条線関係遺跡発掘調査概報Ⅰ』奈良市教育委員会、1983年。
11）注９前掲論文、『延喜式』巻第34木工寮築垣。平安時代の造営尺は奈良時代の小尺と同じと考えられるが、この数値が奈良時代も同様であったと仮定した場合、奈良時代当初の造営尺は大尺であるので、奈良時代の羅城（築地塀）の高さは13大尺と想定する。
12）『両京新記』巻２・京城。唐尺は0.294mで算出した。
13）注10前掲報告、SD2440下層。
14）『延喜式』巻第42・左右京職・京程。
15）奈良文化財研究所『平城京木簡』３、奈良文化財研究所史料第75冊、2006年。
16）「奈良時代の瓦窯跡を新発見－二条大路木簡記載の「越田瓦屋」－」『奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料』No.73、奈良市教育委員会、2023年。
17）今井晃樹「平城京のモデルは唐長安城か？」奈良文化財研究所編『奈良の都、平城宮の謎を探る』2020年。
18）金子裕之「平城宮の園林とその源流」『東アジアの古代都城』奈良文化財研究所学報第66冊、2003年。
19）注17前掲論文。今井晃樹「大明宮北半部と平城宮松林苑」『文化財論叢Ⅴ』奈良文化財研究所学報第102冊、2023年。
20）注18前掲論文。
21）中国科学院考古研究所『唐長安城大明宮』科学出版社、1959年。
22）注19前掲今井論文。
23）注19前掲今井論文。
24）『旧唐書』巻199・日本国。
25）注17前掲論文。

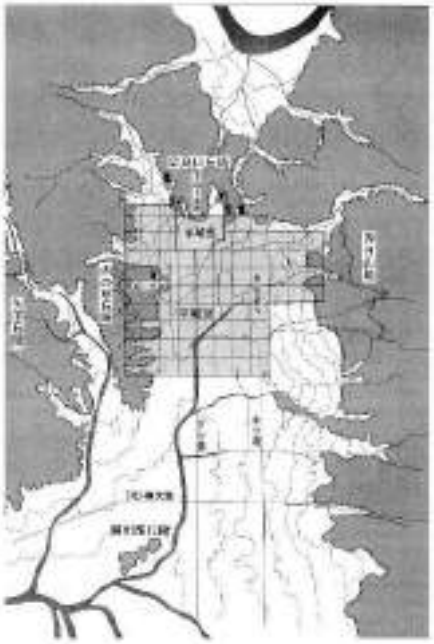

図１　平城京の地形図（広域）

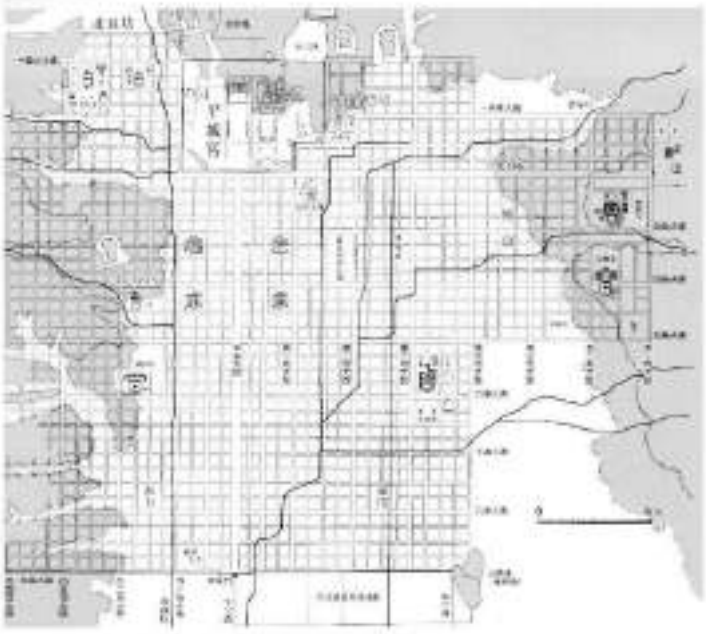

図２　平城京の地形図（狭域）

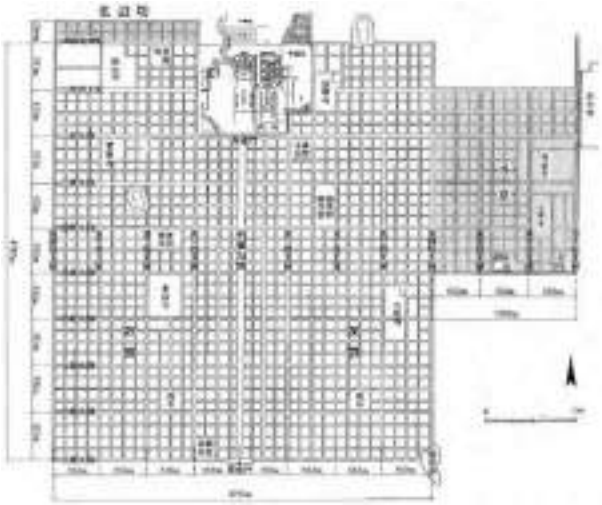

図３　平城京の規模と構造

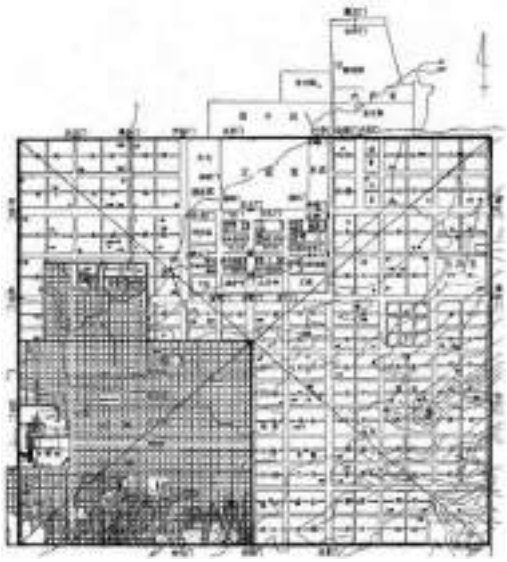

図４　唐長安城と平城京との面積比較

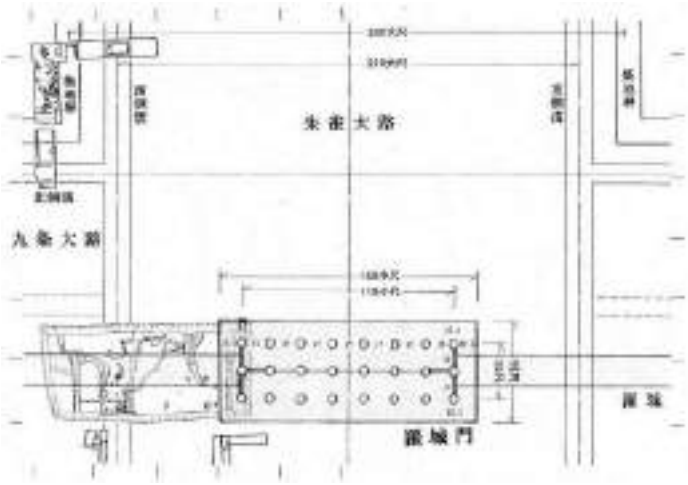

図５　羅城門と朱雀大路の規模

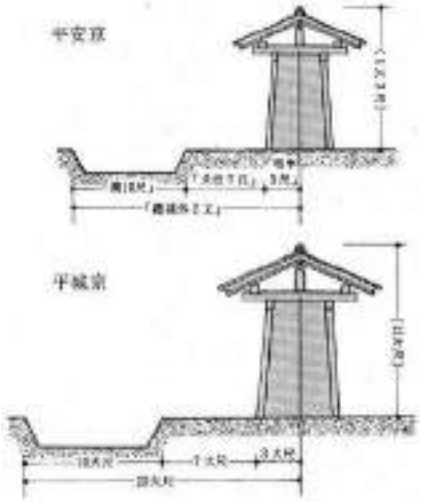

図６　羅城（築地塀）の規模模式図

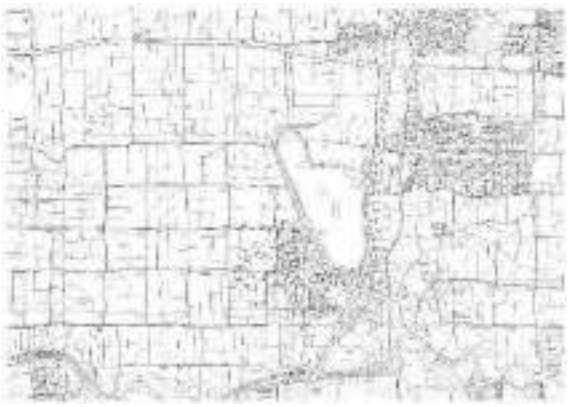

図７　五徳池と周辺の地形

図８　平城宮の構造（奈良時代前半）

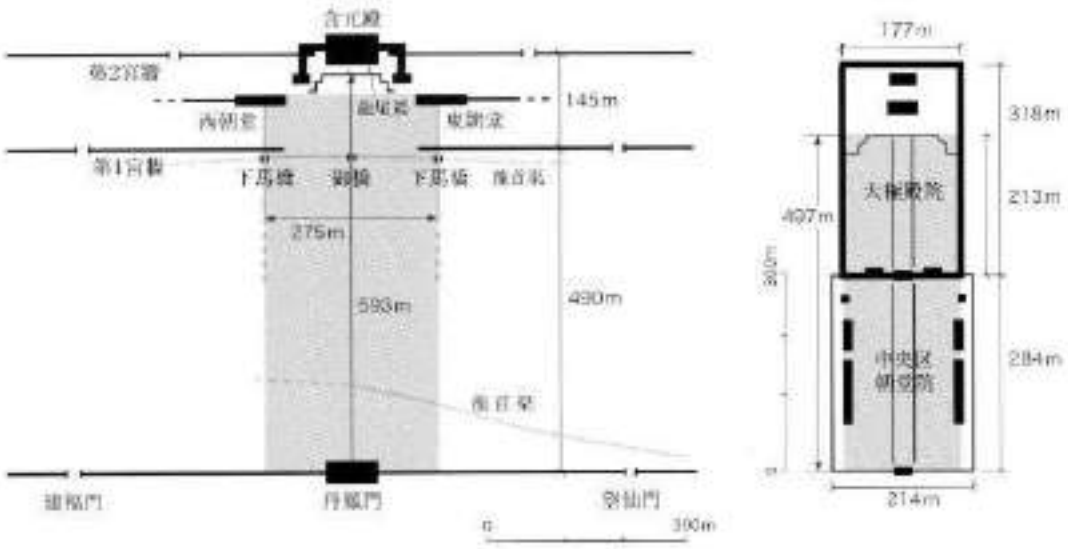

図９　含元殿殿前広場と第一次大極殿院・中央区朝堂院広場の面積比較

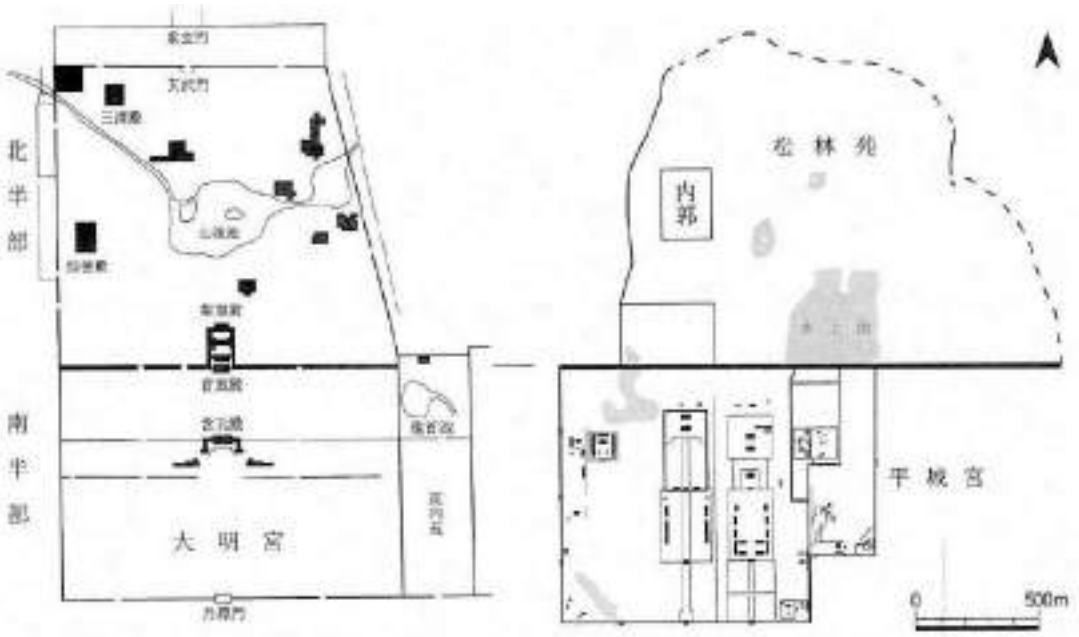

図10　大明宮と平城宮・松林苑との比較